

センター誌抄

2009 (平成 21) 年後期 (7 ~ 12 月)

- 7/ 8 穴水町主催「子ども農山村交流プロジェクト」における海洋活動の講師として池森貴彦専門員を派遣
- 7/11 ヤドカリ学級「ところてんをつくろう!」を開催 9 名参加
- 7/18-19 スノーケリング指導者研修会を開催 14 名受講、能登消防署による普通救命講習受講、並びに指導方法の実施
- 7/22 スノーケリング教室を開催 武蔵野美術大学映画研究会 11 名
- 7/25 体験スノーケリングを開催 午前 4 名、午後 9 名参加
- 7/26 体験スノーケリングを開催 午前 8 名参加
- 7/29-31 わく・ワーク (Work) 体験学習で小本中学校 2 年の新谷賢人君、崎山素伎君、桜井拓末君、田辺一志君の 4 名が職場体験
- 7/31 石川県教育センター主催「水辺の自然体験」の研修講座としてスノーケリング教室と磯の生物の観察を実施 33 名参加
- 8/ 1 体験スノーケリングを開催 午前 20 名、午後 19 名参加  
ボーイスカウト金沢第 6 団カブスカウト隊の大人 18 名、小人 32 名がスノーケリングと貝殻細工を体験
- 8/ 2 体験スノーケリングを開催 午後 8 名参加  
能登半島エコ・スタジアム推進協議会主催「能登エコ・スタジアム 2009、能登エクスカッション」の講師として坂井恵一普及課長を派遣
- 8/ 4 県立小松高校理科 40 名 臨海実習を実施
- 8/ 5 スノーケリング教室を開催 キリスト聖書協会 20 名
- 8/ 7 スノーケリング教室を開催 石川ボーイスカウト連盟 44 名  
金沢市夕日寺自然体験実行委員会「能登・海くらし体験 2009 IKA プロジェクト」の一行 21 名が磯の生物の観察を実施  
金沢大学理学部の 22 名が臨海実習のため来館
- 8/ 8 体験スノーケリングを開催 午前 21 名、午後 21 名参加
- 8/ 9 体験スノーケリングを開催 午前 16 名、午後 14 名参加
- 8/12 能登半島・里山里海体験実習の 18 名が臨海実習のため来館
- 8/15 体験スノーケリングを開催 午前 17 名、午後 20 名参加
- 8/16 体験スノーケリングを開催 午前 13 名、午後 4 名参加
- 8/22-23 環境フェアに「生物多様性と里山里海-いしかわの生物多様性を脅かす生きもの-」をテーマとしてパネル出展

- 8/22 体験スノーケリングを開催 午前 5 名、午後 21 名参加
- 8/23 体験スノーケリングを開催 午前 9 名、午後 10 名参加
- 8/27 加賀市主催「かがつ自然塾-スノーケリング活動」の講師として池森貴彦専門員と東出幸真主任技師を派遣
- 8/29 体験スノーケリングを開催 午前 2 名、午後 3 名参加
- 8/30 体験スノーケリングを開催 午前 2 名参加
- 9/ 8 県議会厚生環境委員会の視察を受ける
- 9/12 ヤドカリ学級「磯の生きものをつかまえよう!」を開催 いしかわ自然学校のインストラクター養成課程の 16 名参加  
いしかわ自然友の会主催の自然観察会に講師として坂井恵一普及課長を派遣
- 9/15 Q&A コーナーの修繕工事が完了
- 9/26-27 スノーケリング指導者研修会を七尾湾里海創生プロジェクトの体験学習会と同時に開催 (P7 参照)
- 10/10 ヤドカリ学級「さかなつり!」を開催 27 名参加
- 10/17 石川県・穴水町主催「水環境フォーラム in 穴水 2009」に「能登の里海と生きもの展示」を出展  
アグリビジネス研究会第 3 回連携リフォーラムが穴水町で開催されゲストコメンテーターとして又野康男館長を派遣
- 10/24 石川県-いしかわ里山里海フェア実行委員会主催「Live! 里山里海」の講師として坂井恵一普及課長を派遣
- 10/28 珠洲市立みさき小学校 5 年生の総合的な学習-海藻と海の世界-の講師として池森貴彦専門員を派遣
- 10/30 能登の海中林 第 31 号発行
- 11/11 本館の屋根瓦修繕工事が完了
- 11/14 ヤドカリ学級「海のおんどんづくり!」を開催 4 名参加
- 11/19 珠洲市直公民館主催「手造りを楽しむ-フグちょうちんづくり!」に協力 11 名参加
- 11/26 石川県文化財審議会記念物専門部会 12 名が視察
- 12/ 5 ヤドカリ学級「フグちょうちんづくり!」を開催 5 名参加
- 12/12 ヤドカリ学級「イカの塩辛づくり!」を開催 17 名参加 講師は(財)能登町ふれあい公社の豊原知足氏

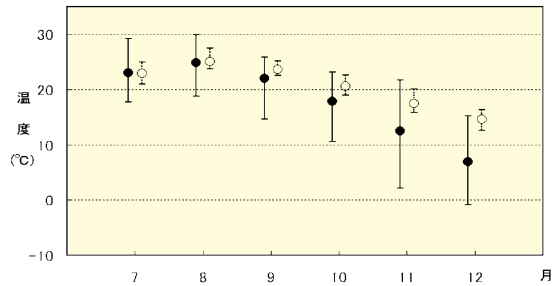
観察路だより

平成 21 年 7 月 13 日、能登町松波沖のはえ縄漁に小型のサメがかかったとの連絡がありました。すでに死んでいましたが譲り受け、観察しました。それはシロシュモクザメで全長は 58cm、胸鰭の間の腹面にはへその緒の痕跡が残っていました。

シュモクザメの仲間には卵胎生と呼ばれる方法で繁殖します。成熟した雌雄は交尾を行い、卵はメス親の体内で受精し、ふ化します。胎仔は初めは卵黄の栄養で育ちますが、後期になると卵黄が入っていた袋が“へその緒”に変わり、それをメス親の子宮内面に付着させてメス親から栄養をもらって成長します。能登でとれたシロシュモクザメにへその緒の痕跡が残っていたことから、この子ザメが能登近海で生まれたことが分かります。もし当センター周辺でサメ類の目撃情報が得られた時にはスノーケリング活動を中止する覚悟を決めました。

今年の夏は梅雨明けが 8 月にずれ込み、夏らしい青空の少ない冷夏となり、磯の水温も平年より約 2℃低くなりました。しかしながら、台風の接近がなかったため、荒天でスノーケリング活動を中止したのは 8 月 10 日の 1 日だけ、述べ 430 人がスノーケリングを楽しむことができました。

現在使っているスノーケリング器材は新調から早くも 10 年が過ぎ、特にウエットスーツの一部は修理不能の状態、少しずつですが新規購入の準備をしています。(K.S)



2009年7月から12月の気温と水温の月変化

気温：午前9時に観測した月別平均値 (●)  
 実線は月別の最高・最低気温の範囲を示す  
 水温：午前9時に観測した月別平均値 (○)  
 破線は月別の最高・最低水温の範囲を示す

のと海洋ふれあいセンターだより「能登の海中林」  
 通巻第 32 号 平成 22 年 3 月 25 日 発行  
 編集発行 **のと海洋ふれあいセンター**  
 住所 石川県鳳珠郡能登町字越坂 3-47 (〒927-0552)  
 TEL 0768(74)1919(代): FAX 0768(74)1920  
 URL: <http://notomarine.jp/>  
 E-mail: [nmci@notomarine.jp](mailto:nmci@notomarine.jp)

のと海洋ふれあいセンター

設置者：石川県（環境部自然保護課） 管理運営：(財)石川県県民ふれあい公社  
 入場料：個人は高校生以上 200 円、団体 (20 名以上) 160 円、中学生以下は無料  
 開館時間：午前 9 時～午後 5 時 (但し、入館は午後 4 時 30 分まで)  
 休館日：毎週月曜日 (国民の祝日を除く) と年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)



のと海洋ふれあいセンターだより

の と かい ちゅう りん  
能 登 の 海 中 林

NEWS LETTER OF NOTO MARINE CENTER No. 32. Mar. 2010



のと海洋ふれあいセンター自然体験館の眺望デッキから立山連峰を望む(4-5ページ参照)

<目次>

七尾湾における海岸の人工化と動植物の現状は? .....	池森 貴彦 ...	2
立山連峰が見えると次の日は荒れる? .....	又野 康男 ...	4
Live!里山里海~里山里海を活かし、共に生きよう~ .....	野口由香里 ...	6
トピックス .....		7
センター誌抄と観察路だより .....		8

平成 22 年 3 月

# 七尾湾における海岸の人工化と動植物の現状は？

池森 貴彦

七尾湾は石川県の北東部に位置する湾で、穴水町恵比須崎と七尾市勝尾崎を結ぶ線、そして七尾市勝尾崎と観音崎を結んだ線、および陸岸により囲まれた海域と言われています。その中央部に能登島があり、能登島を中心に北部を北湾、南西部を西湾、南部を南湾と一般的に区分されています。海岸線は七尾市と穴水町に含まれ、「能登島大橋」と「ツインブリッジのと」の2本の橋で能登島に渡ることが可能です。今回私たちは七尾湾について、海岸線はどのくらい人工海岸化されているか？沿岸にはどのような動植物が棲んでいるのか？生物の多様性は？などについて、海からの目線で調べてみました。

## 七尾湾の海岸線

七尾湾の海岸線の人工化がどれほど進んでいるかを調査しました。海岸線の人工化は、環境省の区分に従い3段階に分類しました。その区分は、低潮海岸線から通常大波が到達する限界線までの範囲を汀線として、①汀線が人工によって改変されないで自然の状態を保持している海岸を自然海岸、②汀線の一部が改変されているが潮間帯は自然状態を保っている海岸を半自然海岸、③潮間帯に人工構築物がある海岸を人工海岸としました。海岸の確認は直接現地に出向いて行いました。海岸道路から容易に観察できる所もありますが、場所によっては車がやっと通れる狭い道に入り込み、それ以上進めない場合、歩いて藪に分け入りしました。そしてなんとか海岸にたどり着き調査しました。はたから見るとずいぶん怪しい人に見えたに違いありません。そしてどうしても陸路から行けない所は海上から船で確認しました。そのようにして調べた結果、七尾湾は81%という高い比率で人工海岸化されていることが明らかになりました。環境省は1993年に七尾湾周辺の海岸の人工化について調査しています。ところが、その結果には七尾湾だけのデータは残念ながら無いので、図1のように市町ごと（穴水町と七尾市）の海岸区

分を比較してみると、16年の間でも人工海岸の比率が高まっていることが分かります。ただし、環境省の調査は現地に赴くことなく地図と航空写真で調べているので、今回のような大変な、そして詳細な調査ではなかったはずです。



図1 穴水町と七尾市の海岸の改変状況

## 七尾湾の海岸生物

七尾湾の10地点の岩礁海岸を図2のように調査地点として定め、各調査地点で半径約50m以内の、潮間帯から飛沫帯にかけての動植物の生息状況を調査しました。調査は海の状況が安定しやすい6月に行いました。調査で観察された海岸動物と海藻草類の種数を図3に示します。

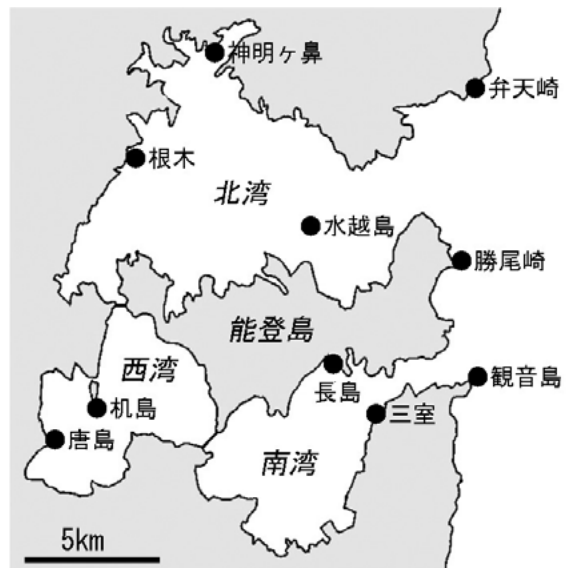


図2 七尾湾の岩礁海岸の調査地点

海岸動物は調査した10地点で56種が見つかり、種類が最も多かったのは勝尾崎で31種、弁天崎と観音島、水越島の3地点も25種以上でした。最も少なかったのは根木の8種、その他の5地点は15～20種でした。アラレタマキビガイとタマキビガイ、ヨメガカサガイ、イシダタミガイの4種は全

での調査地点で観察されました。また、スガイは根木を除く9地点で、オオヘビガイとクボガイも8地点で観察されました。クロヅケガイやカメノテ、ウノアシガイ、ムラサキウニは湾口部に位置する弁天崎と勝尾崎、観音島の3点と水越島で観察されました。水越島は北湾内にありますが、海岸動物の生息状況からは湾口部のような波あたりの強い環境であることが分かります。

海藻草類は10地点で海藻47種と海草4種の計51種が見つかりました。最も多くの種類が観察できたのは、動物と同様に勝尾崎で24種、次いで水越島が23種でした。最も少なかったのは三室の6種、次いで神明ヶ鼻の9種でした。その他の6地点は10～16種が見つかりました。全ての調査地点で観察されたのはウミトラノオだけでした。ホソジュズモやウスユキウチワ、イシモズク、スギモクなど多くの種が勝尾崎と水越島だけで見つかり、勝尾崎では砂地がないため海草が見られないことを除けば、2つの調査地点は種数も多くよく似た植生であると考えられます。動物も植物も湾口部の3地点と水越島で種数が多く、逆に湾の奥側では種数が少ない結果となりました。

七尾湾は人工海岸が約8割と高い比率を占めますが、多くの種類の動植物が生息していることが明らかとなりました。しかし、湾奥ではその種数が少なくなる傾向が認められます。また、今回の調査は可能な限り自然海岸を選定して行ったので、種数が多くなったのかもしれませんが。今後はあえて人工海岸も含めて調査することで、七尾湾の生物相をより深く理解できるのではと思います。

### 七尾湾の海の外来種と生物多様性

今回の調査で、外来種のタテジマフジツボとヨーロッパフジツボが唐島で見つかりました。唐島は西湾の一番奥にある調査地点です。このように奥まった場所で外来種が見られた理由の1つとして、カキ養殖の影響が考えられます。西湾ではカキ養殖が盛んに行われていますが、種ガキは他県から購入することが多いため、いっしょに運ばれてきた可能性があります。また、南湾には七尾港があり、貿易が盛んで外国からの貨物船も頻繁に入港します。船底に付着したり、パラスト水とともに

外来種が侵入する可能性があります。今後は七尾港の岸壁など人工海岸を重点的に調査していくと、自然海岸では全く見つからないような外来種が見つかるかもしれません。外来種のムラサキガイは、県内でも人工海岸の岸壁やブイ等にごく普通に見られますが、今回の調査では観察されませんでした。人工海岸では普通に見られるこの外来種が、自然海岸で見つからなかったことにも興味を持たれます。外来種の侵入は生物多様性に損害を与えます。折しも今年には国際生物多様性年です。また10月には愛知県名古屋市中で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催され、生物多様性に対する関心が日本及び世界で非常に高まると考えられます。七尾湾の海岸動植物の調査も新たな展開を迎えるのかもしれません。(普及課専門員)

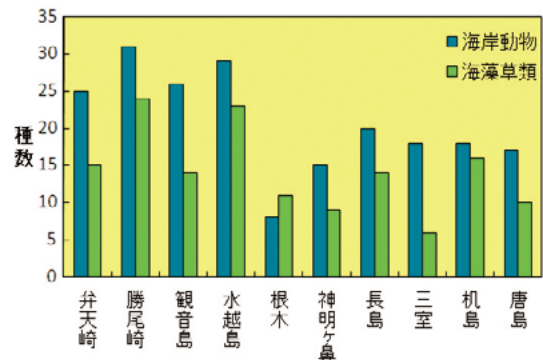


図3 調査で観察された海岸動物と海藻草類の種数



図4 七尾市能登島鰻目町勝尾崎の調査地の風景



図5 穴水町根木の調査地の風景

# たてやまれんぼう 立山連峰が見えると次の日は荒れる？

又野 康男

明治・大正・昭和三代の漢詩人である国分青崖は、  
「立山を望む」と題して

夢に名山を見ること 四十年  
暮に山麓に投ずれば 只雲煙  
天明日出でて 驚き相揖すれば  
玉立せる群仙 我が前に在り

と、富士山、白山とともに日本三霊山と謳われる立山の眺望を詠じています。

その立山連峰は、のと海洋ふれあいセンターの前面に広がる海の彼方に、浮かぶが如く聳え立ち、雄大さと海の青さに反映された白銀の輝きで思わず息を飲むほどの絶景を演出してくれます。この絶景をいつでも見たいと思うのですが、立山連峰が見えると少し困ることもあるということです。



実は能登の漁師さんの間では、昔から風や空や山などの様々な自然からのメッセージを目や肌等の五感で受け止め、それらの集積から編み出した経験則に基づいて気象や海象を予想する観天望気というものがあります。それらの中に「立山連峰が見えると次の日は荒れる」とか「立山連峰が見えると次の日は雨が降る」というものがあります。

そこでこの観天望気の信頼度のほどを確かめられないかとの思いが頭をかすめ、のと海洋ふれあいセンターが休館日以外は毎日行っている気象観測の観測項目に立山連峰が眺望できたか否かを加え、平成19年(2007)7月から観測を開始しました。今回は平成21年(2009)12月までの観測結果について報告します。

立山連峰の眺望の程度については特に区分せず、すっきり見える状態から霞んで見えるものまで全て含めました。

立山連峰が眺望できた日数は、平成19年(2007)は観測日数162日の内、13日(8.0%)、平成20年(2008)は観測日数327日の内、28日(8.6%)、そして平成21年(2009)は観測日数325日の内、26日(8.0%)で、合計814日の観測日の内、眺望できたのは67日(8.2%)でした。月別に眺望できた確率を見ると平成19年(2007)は7月以降、12月を除く各月で眺望できましたが、特に8月～10月は各月とも10%を超える確率でした。平成20年(2008)は8月と10月には眺望できませんでしたが、そのほかの月には眺望でき5月は20%を超え、6月、11月、12月も15%を超える確率でした。平成21年(2009)は2～4月は眺望できませんでしたが、11月と12月は平成20年(2008)と同じく高い確率でいずれも20%を超えました(図1)。

このように眺望できる確率は月により異なることが分かりますが、年間の眺望の確率は8.0～8.6%で年による大きな変動はありませんでした。

この眺望の確率は日頃、当センターの磯の観察路の周回の折りに立山連峰を海越しに眺めている感覚と比べて低く感じられ、改めて能登の海と立山連峰のコラボレーションを仰ぎ見ることができることの幸運を思い知らされた気がします。また稀に見ることができるが故の絶景と言えるのかも知れません。なお富山県(どこからの眺望か明らかではありませんが、恐らく雨晴海岸ではないかと思われます)で観察された例での眺望の確率は平成16年(2004)～平成20年(2008)は19～25%となっています(過去の眺望記録ウェブサイト)。能登からの眺望と比べてかなり高い確率で、地元の富山県に眺望の確率の高さを譲る結果となりました。

さて表題でも示した「立山連峰が見えると次の日は荒れる」ということはどうでしょうか。

天候の荒れ具合を風力と波浪を指標に、立山連峰が眺望できた67事例の内、眺望できた日の翌日の気象観測を行っていない3事例を除く64事例で検討しました。

眺望できた日の翌日の風力が眺望できた日の風力

と同等か弱まった日、つまり眺望できた日の翌日の方が風が穏やかであった日は39日(61%)を数えました。逆に翌日の方が風が強まった日は25日(39%)で、そのうち風力の階級が2以上強まったのは16日(25%)でした。また眺望できた日の翌日の波浪が眺望できた日の波浪と同等か弱まった日は43日(67%)を数えました。波浪が翌日の方が強まった日は21日(33%)で、そのうち波浪の階級が2以上強まった日は11日(17%)でした。なお眺望できた日と翌日の風力と波浪の具体的な数値の例として、図2に平成21年(2009)の26の事例の風力を、図3に波浪の事例を示しました。

以上のように観測では立山連峰が眺望できた日の翌日の風の強さや波浪の大きさが眺望できた日より強まったのは、概ね1/3の確率となりました。

また立山連峰が眺望できた日の天候は晴れが24日、曇りが35日、雨が5日でした。眺望できた翌日に雨や雪が降ったのは9例(14%)に過ぎず、その中で晴れから雨に転じたのが2例、曇りから雨や雪に転じたのが2例、5例が眺望当日も翌日も雨でした(図4)。従って今回の観測事例では「立山連峰が見えると次の日は荒れる」ということや「立山連峰が見えると次の日は雨が降る」ということを裏付ける結果には至りませんでした。

ただ、のと海洋ふれあいセンターの気象観測は午前中の定時・定地観測であるため一日の内の一断面、あるいは一地域を捉えているに過ぎない結果であり、時々刻々と変化する気象を把握していないという側面がある事は否めません。

今日の気象予報技術では局地的にも長期的にも精度の高い予報が可能となりました。しかもその情報は随時容易に入手できる時代になりました。そのため昔から伝えられている様々な観天望気への関心や必要性は次第に希薄になっているかも知れません。また今や世界的な課題となっている地球の温暖化がこれまでの観天望気を覆すことになるのかも知れません。しかし自然と寄り添って営む農林水産業に携わる人達にとっては、先人が長い期間に亘って研ぎ澄ましてきた大切な知恵であり、自然への畏敬の念も含めて次代へ引き継ぐ大切な伝統文化ではないかと思えます。

さて今年には生物多様性条約第10回締約国会議が名古屋市で開催され、同会議支援実行委員会公式ウェブサイトによると生物多様性の保全と持続的な利用の促進、さらに自然との共生した地域づくりなどが

話題になるようです。この会議の開催を契機に自然と共生している里山・里海への関心を高め、また先人が正対してきた自然からの様々なメッセージに私たちが耳を傾け目を見開いて、自然への理解を深めましょう。(館長)

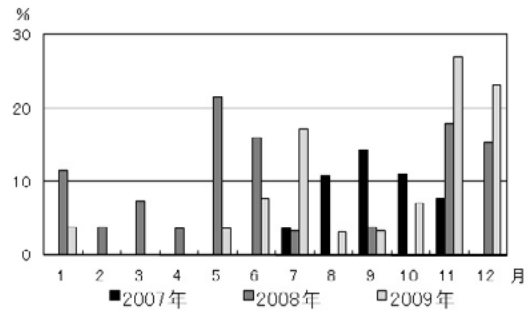


図1 立山連峰の眺望できた日の割合

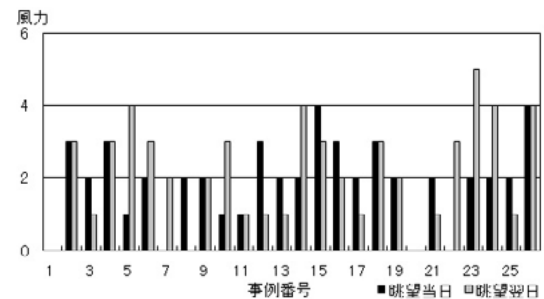


図2 立山連峰眺望当日と翌日の風力 (2009年)

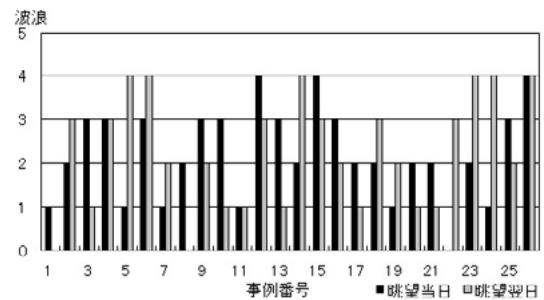


図3 立山連峰眺望当日と翌日の波浪 (2009年)

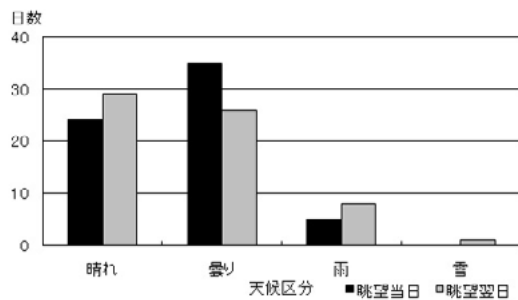


図4 立山連峰眺望当日と翌日の天候

# Live! 里山里海～里山里海を活かし、共に生きよう～

(石川県環境部自然保護課) 野口 由香里

里山里海の大切さとその価値について理解を深めていただくことを目的に、2009年10月、穴水町で「Live! 里山里海」を開催しました。能登在住の皆さまや高校生、行政関係者など約350名に会場していただきました。

## メッセージと事例発表

当日は地元県立穴水高等学校の生徒による司会で幕が開きました。オープニングメッセージとして、のと海洋ふれあいセンターの坂井恵一普及課長から「里山里海を活かし、共に生きよう」と題して、能登の海の生きものや地形の特徴、人と海との関わりについてわかりやすく解説いただきました。

続いて里山里海と地域の可能性をテーマに事例発表が行われました。まず、能登町の県立能登（旧能都北辰）高等学校の生徒が学校として取り組んでいるアワビやイワガキ、コンブなどの養殖とその商品化・ブランド化などについて紹介してくれました。次に、



能登高等学校の生徒による事例発表



併催された里山里海写真展

珠洲市在住の写真家である足袋拔豪氏が映像とともに故郷の里山里海への思いを語り、金沢大学能登学舎の教員、小柴有理江氏から「能登里山マイスター」養成プログラムの内容についての報告がありました。続いて、平成19年3月の能登半島地震を機に輪島市へUターンした安原信治氏から、自身が立ち上げた能登の産物を中心とした物産販売ウェブサイトなどについて報告があり、最後に全体の意見交換が行われました。

## 里山里海ライブと写真展

後半は沖縄出身の歌手、神谷千尋さんのコンサートが行われました。神谷さんはふるさと沖縄の海への思いを語りながらオリジナル曲や沖縄の民謡を歌い、フィナーレとして能登高校と穴水高校の生徒らもステージに上がって一緒に歌い、最後は観客席も含めて沖縄民謡を踊り、楽しい時間を過ごしました。

また、会場では里山里海写真展も併催され、発表者である足袋拔氏の作品を中心とした海の生きものや風景写真が参加者の目を楽しませてくれました。

## アンケートから（抜粋）

最後に参加していただいた皆様からの意見や感想を紹介したいと思います。

- ・若い人が自分の周りを見つめ、その素晴らしさに目覚めることは地域の活性化にもきわめて大切なこと。
- ・事例発表で能登の地を離れて初めてその素晴らしさが分かったと言われたがそのとおり。
- ・今日の発表を聞いて、改めて素晴らしい自然環境のもとに暮らしているという事を再認識しました。
- ・里山里海で生きるためにも経済活動（ビジネス）の視点で、持続的に守り育てつつPRすべき手法を考えていかねばならない。
- ・里山里海では生活できない。農業や林業で生活できるシステム作りが必要ではないか。

これら多くのご意見を参考に、今後も地域の宝である里山里海を守り、共に生きていくためのさまざまな取組を行っていききたいと思います。

※「Live! 里山里海」は全国モーターボート競走施行者協議会からの助成を受けて実施されたものです。

## トピックス

## アオウミガメの漂着

横井 将大

2009年11月17日の午後3時過ぎ、能登町小木の浜野さんより同町の羽根海岸でウミガメが漂着しているとの電話が入りました。

さっそく坂井普及課長と現場に向かうと、砂浜に打ち上がっていました。外傷はないものの腐敗がひどく、強烈な悪臭もしました。頭部の鱗板の形状や体の特徴からアオウミガメのメスで、甲長が84cm、甲幅は81cmありました。写



真と記録を取ってセンターに帰り、能登町役場へ処分のお願いの連絡をしました。

アオウミガメは熱帯から亜熱帯の沿岸域に生息します。日本周辺では6月～9月頃にかけて主に小笠原諸島で産卵しますが、近年では南九州市や愛知県でも産卵が確認されたそうです。しかし昔からタートルステーキなど食用として人気があり、世界的に漁獲されてきました。現在では、乱獲や産卵場に適した環境がなくなってきているのが原因で個体数が減少し、ワシントン条約附属書Iに記載され国際取引が全面的に禁止されています。しかし今でも海に漂流しているスーパー等の買物袋などをエサと間違えて飲み込み、死亡するウミガメが増えているそうです。

ウミガメに限らず、漂着する海洋動物には人間による悪影響が少なくないのです。このような被害が少なくなることを願っています。(事務職員)

## スノーケリング指導者研修会と七尾湾里海創生プロジェクト体験学習会

池森 貴彦

平成21年9月26日と27日の両日、七尾湾里海創生プロジェクトと共同でスノーケリング指導者研修会を開催しました。七尾湾の里海としての魅力を海の中から探ろうという試みです。

26日は穴水町産業振興課の仲介で同町の新崎漁港から400mほど沖にある青島までボートで移動してスノーケリングを行いました。長さが30cm程もある二枚貝のハボウキガイ、真珠の採れるアコヤガイ、鮮やかな緑藻のナガミルなど、他の海ではなかなか観察できない動植物を見ることができ、その後新崎釣筏組合の皆さんと海と生きものについて意見交換をし、さらに坂下たまきさんから、120年前の天文学者であるパーシヴァル・ローエル氏の能登旅行の講話と写真を紹介していただき、とても有意義な研修会となりました。

27日は能登島でスノーケリングの予定でした

が、朝から東風が強くとでも実施できそうにないとのこと。そのため、能登半島の西側にある県水産総合センター志賀事業所の職員の方に海の状態をお聞きしたところ、実施可能とのこと、急きょ場所を志賀町に変更して行いました。なかなか見つけるのが難しいタツノオトシゴが2個体も見つかり、とてもラッキーな活動になりました。関係各位に感謝いたします。(普及課専門員)

